展示室7　礒部草丘（いそべそうきゅう）と群馬（ぐんま）の画家（がか）たち　2025年3月1日(土)～4月6日(日)

礒部草丘は、明治30（1897）年、現在の群馬県伊勢崎市宮古町に生まれました。大正8（1919）年に上京して、日本画家の川合玉堂に入門します。大正13（1924）年、第5回帝展に初入選して頭角を現すと、昭和2（1927）年には、同門の児玉希望らと戊辰会を結成、精力的に制作を続け、昭和3（1928）年の第9回帝展より帝展に連続入選、9（1934）年の第15回帝展で特選となります。戦後は日展に委嘱出品を続け、昭和31（1956）年以降は個展を中心に作品を発表しました。群馬美術協会の結成など地元の美術振興にも貢献し、昭和38（1963）年、群馬県功労賞を受賞しています。

草丘が画家の道を志す前、群馬県立前橋中学校（現在の群馬県立前橋高等学校）を卒業後に一年志願兵として高崎歩兵十五連隊に入隊した時、そこで出会った大間々の新井国蔵とは生涯の友となりました。今回、ご厚意により《簗の豊秋村》（第9回帝展入選）が当館に寄贈されたため、新井国蔵が愛蔵していた、まるで金と銀、対比的な印象を与える二点、《簗の豊秋村》と《空山流水》（第12回帝展入選）を並べて紹介できるとともに、《房南閑居》（第11回帝展入選）を加えた、画業前期の到達点である三点を同時にご覧いただく貴重な機会となりました。南画風の趣を残しながらも、緻密な線と鮮やかな色彩を用いた幻想的な雰囲気をまとう作品をおたのしみください。

また、群馬ゆかりの画家として、草丘と同時代の岸浪百艸居らの鳥をモチーフにした作品や、草丘とは異なる幻想的、神秘的な世界を見せる髙橋常雄、塩原友子による作品を合わせてご紹介いたします。

№	作者名	作品名	制作年	技法材質・形状	寸法（縦×横cm）	備考
1	礒部草丘（いそべそうきゅう）	炭窯（すみがま）	昭和2年（1927）頃	絹本着色・軸装	175.3×285.2	
2	礒部草丘	房南閑居（ぼうなんかんきょ）	昭和5年（1930）	絹本着色・額装	255.0×131.9	
3	礒部草丘	簗の豊秋村（やなとよあきむら）	昭和3年（1928）	紙本着色・軸装	265.1×175.4	令和5年度新収蔵作品 萩原順子氏寄贈
4	礒部草丘	空山流水（くうざんりゅうすい）	昭和6年（1931）	絹本着色・額装	248.0×170.0	新井国蔵氏寄贈
5	岸浪百艸居（きしなみひゃくそうきょ）	雨呼ぶ鳥晴呼ぶ鳥（あめよとりはれよとり）	昭和10年（1935）	絹本着色・軸装	64.8×71.8	大沢ウメ氏寄贈
6	高橋光輝（たかはしこうき）	黄粧（おうしょう）	昭和41年（1966）	紙本着色・額装	119.0×179.0	
7	石原紫雲（いしはらしうん）	群雀図（ぐんじゃくず）	昭和50年（1975）	紙本墨画淡彩・軸装	137.1×68.8	石原成徑氏寄贈
8	石原紫雲	角鴟と雀図（みみずくすずめず）	昭和50年（1975）	紙本墨画淡彩・軸装	138.4×69.5	石原成徑氏寄贈
9	髙橋常雄（たかはしつねお）	聖地巡拝記（せいちじゅんぱいき）	昭和50年（1975）	紙本着色・額装	217.0×162.0	
10	塩原友子（しおばらともこ）	日月曼荼羅（じつげつまんだら）	昭和49年（1974）	紙本着色・ パネル（5枚組）	各75.7×75.7	
11	塩原友子	ウイグルの空（そら）	昭和58年（1983）	墨、彩色、紙・額装	51.5×160.5	作者寄贈

＊作品保護のため、会場内の温度、湿度、および照度を調整して展示しています。
また、都合により展示作品を変更する場合もございます。ご了承ください。

【次回予告】「院展ゆかりの日本画家たち」　4月19日(土)～6月1日（日）
日本美術院ゆかりの画家たちの多彩な作品をご紹介します。

群馬県立近代美術館